

私の空襲体験

昭和二十年七月一日は熊本大空襲の日。私が国民学校初等科三年生の時だ。

この日も爆撃機 B 29 の来襲で空襲警報が発令され、私たち家族は防空壕へ非難していたが、いつもと違い町内にも焼夷弾が落ち、あちらこちらで火の手があがった。

「このままいたら焼け死ぬぞ。全員防空壕から出て逃げろ。」という隣保組長さんのふれ回る大声に、防空壕から出て隣保組長さんの後ろについて人家のない方へと逃げた。父は夜勤で母の両手に兄妹五人はしっかりと握り、広い原っぱに逃げたと記憶している。

当初、私たちは J R 水前寺駅近くに住んでいた。母から聞いたところによると、逃げた方角は、保田窪、帯山方面で今の住宅街も一面がから芋畑だったそうである。

逃げる途中、何回か B 29 が私たちの頭上を旋回し、焼夷弾の破片がバラバラと落ちた。その都度、妹たちは怖さのあまり母にしがみつく。母は肩を寄せ合い、その場に蹲うずくまっている私たちの上に覆い被り守ってくれた。まさに、生と死の境を彷徨さまよったのである。

どのくらい時間が経ったのだろう。敵機が去り、東の空が白みかけ家路へと急いだ。水前寺駅一帯は、一面が焼け野原。兵隊さんが焼死体を一箇所に集め葬っていた。荷物のように積上げられた死体の山。地獄を見る光景であった。

母の法事のようにこういう話をして、就学前だった妹たちは、あまり記憶がないと言う意外であった。

私のこの小さな空襲体験、家族で私しか記憶していない、しかも年々薄れていく中、その恐ろしさ、悲惨さを妹、子どもたちへ文字として残しておきたいと思い応募した。